

No. 275【2017年9月22日配信】  
手ぬぐいの型紙で巡る青森のお店（担当：児玉）

こんにちは。文化財課の児玉です。現在、浪岡地区で発掘調査を実施していますが、あと1週間で調査終了です。最近はめっきり涼しくなりましたが、夏の発掘調査は日陰になるところも無く、<sup>ひたい</sup>額から流れる汗が図面に落ちて、その汗を拭いているうちに、せっかく書いた図が消えてしまう。ということもあります。

そこで、活躍するのが「手ぬぐい」です。手ぬぐいを額に巻いていると、汗が垂れずにすみまし、濡らして首に巻くと熱中症対策にもなる便利なアイテムです。

手ぬぐいは、江戸時代中期頃から、国内での綿花栽培に伴い、木綿の手ぬぐいが庶民に使われるようになり、全国各地に普及していきました。手ぬぐいは、ものを拭いたり、包んだりするほか、帽子のかわりにするとか、裂いて包帯や紐のかわりにするとか、最近では<sup>がく</sup>額に入れて飾ったりするなど、様々な使い方がなされています。

手ぬぐいの製作にあたっては、生地を織り、型紙を作り、版を作り、生地に版を載せて糊をつけ、染め、洗い、干し、裁断するなど、一連の工程を経て製品となります。青森市内では、昭和30年代に商店などが広告用として、手ぬぐいを得意先に配布しており、それらの型紙を現在、「あおり北のまほろば歴史館」で展示しています。型紙は、3枚の和紙を重ね、柿渋を塗って貼り合わせた「渋紙」と呼ばれるもので作られ、彫刻刀などで模様や文字が刻み込まれています。昭和30年代になって紗張り（スクリーン張り）が普及しましたが、それ以前は糸掛けによるものがほとんどでした。歴史館に展示しているものも、糸掛けによるもので、目を凝らしてみると、文字の部分の上下が細い糸で繋がっていることがわかります。

展示している手ぬぐいの型紙は、青森市栄町 古木米穀販売所、東上古川町 石川商店、青森市沖館米穀販売所 棟方、青森市油川町 田中美千男商店、青森市裏町 葛西製粉所、青森市古川千刈 本田蒲鉾店、青森駅前魚市場、青森 米田商店、青森 長峯の精肉、青森市 マルヤマ精肉店、青森市堤 長内商店、青森市浦町 横山豊工店、青森市古川美法町 井上家具木工所、青森市博労町 阿部忠商店、青森市上古川角 齋藤自転車店、青森市大町一丁目 マルイモータ商会、となっており、今も現存するお店もあります。この頃の青森で過ごしてきた方にとっては、知っているお店が見つかるかもしれません。